

## 九州大学医学部の誕生と関連医史学資料について

曾 田 豊 一 一

現在の九州大学医学部は、明治三六年（一九〇三）に創設された京都帝国大学福岡医科大学に始まりました。そこで、この福岡の地に国立の医科大学ができることになった経緯を中心に、その創立の最大の功績者である大森治豊の事績と、東京大学と京都大学に続いて日本で三番目に設立されたこの九州帝国大学が輩出した医学史上に輝ける業績を残した教授や卒業生についてお話しします。

慶応三年（一八六七）、その当時「蘭癖大名」と呼ばれた筑前黒田藩藩主黒田長薄によって、福岡市内の土手（どて）町に「養生館」という医学校が創立されました。適塾の緒方洪庵に蘭学を学んだ武谷祐之（別名棕亭りょうてい）が頭取として采配をふるい、付属の診療所（この診療所が、幾多の変遷を経て福岡医科大学に発展していった）において漢洋折衷の医学を実践しました。一時福岡藩の廃藩により廃校の危機に陥りましたが、明治六年（一八七三）に養生館所属の医師であった前田凌海、百武萬里、有吉周平、香江誠、吉富洞雲、河嶋養林ら六名で、市内赤坂門に新しく修猷館医学所兼併置診療所を開きました。しかしこれも経営難に陥ったため、県当局に医学校再開を建議したところ、那珂川河畔の博多中島町（現在の中洲）の岡新地にあった福岡藩精錬所跡地を授けられ、ここに仮校舎を建て院長に長崎より西川黙蔵を迎え、明治七年（一八七四）に開院するに至ったのです。

明治一〇年（一八七七）にはその隣地に医学校を併設した県立福岡医学校病院を新築し、岐阜に転出した西川黙藏の後任に東大（正式には東京医学校）出身の大河内和（かず）を病院長として招聘しました。日本で最初の理学博士となった名古屋出身の伊藤圭介を大伯父に持った大河内和によつて、初めて福岡の地にドイツ医学が導入されたと言われています。

明治一二年には、人痘種痘で知られる秋月藩医緒方春朔の縁戚にあたる香江誠が福岡医学校校長に就任しています。

明治一六年、甲種医学校（こを卒業すると試験に合格せずとも開業できた。ただし、そのためには教師四名が医学士である必要があった）に昇格すべく、東京大学医学部と改称してから初めての医学士となった一八名の中から、山形県上山（かみのやま）出身の大森治豊と周防岩国出身の熊谷玄旦の二名を採用したのです。主として大森が外科を、熊谷が内科を分担していました。明治一六年に院長の大河内が急逝したため、この大森治豊が院長職を引き継ぎ、東大から新たに池田陽一学士と榎本与七郎学士を迎え再出発しました。

明治一八年（一八八五）、画期的な事件が起こりました。後に長崎と熊本を交えた三つ巴の医科大学誘致合戦に勝利する大きな要因ともなった、本邦初の邦人の手による帝王切開術の成功です。東大に御雇外科教師として来日した恩師シュルツ（Wilhelm Schultze）譲りの「アゼプチック ヒルルギー」を駆使して、母子とも助けることができました。日時は明治一八年四月二八日であり、翌年の中外医事新報誌上に医学士大森治豊ならびに池田陽一供述「ポルロー国帝截開術」として発表されています。この手術の成功により県立福岡医学校病院は全国的に注目されるようになり、「大森の手術の腕は神技に近い」とまでの評価を得たのでした。

明治二四年（一八九一）、大森は「心腹切解一百例」（すなわちこれは帝王切開を含めた開腹術のことですが）この功績により、帝王大学評議会の推薦を得て佐藤三吉や北里柴三郎等とともに、第二回の医学博士号を授与されています。しかしながら、折から明治政府が府県立医学校廃止の方針を打ち出したことから、福岡医学校は明治二一年、遂に廃校に追い込まれ、医学校病院の存続も危ぶまれる事態に陥りました。しかし幸いなことに、外科医としての大森の名声も味方し

てか、付属病院は県に移管され、大森院長のもとで県立福岡病院として存続し再出発することになりました。以後大森は、福岡への医科大学誘致という大望を胸に、県立福岡病院をいつでもそのまま医科大学に昇格させられるような日本一の最新鋭病院にすべく、病院経営に心血を注いでいったのでした。そうして次第に大森ら首脳陣の尽力により着実に実績が上がるにつれて、経済的な理由から毎年のように県議会に持ち出されていた県病院廃止論も影を潜めるようになりました。

一方、県立病院の発展と共に、中洲の地では病院が手狭になってきたため、新天地へ移転しようという気運が生じてきました。大森らは、将来の国立医科大学誘致を視野に入れた新病院建設を企画立案し、ついに明治二九年(二八九六)、現在の地(当時は千代村堅粕東松原、通称千代の松原)に、病院内電話交換台、また画期的とも言うべき「セントラルヒールディング」をも備えた、当時としては最新鋭の病院を建設、移転したのです。後の明治三八年に東京大学から赴任した内科学の武谷廣助教授は、「東大にも、このような最新鋭の設備はない」と驚嘆しています。

余談になりますが、この時期大森はよく上京していたようで、こういう機会に日本外科学の大恩人であるスクリバ(Julius Scriba)の門下生と会することが度々あり、それがきっかけとなって学会設立が発起され、明治三二年(二八九九)に日本外科学会が創立されたのです。

さて明治三〇年代になり、東大、京大に続く第三番目の総合大学設置の方針を政府が打ち出すと、その準備段階として「国立の医科大学を何処に設置するか」が取りざたされるようになりました。これに呼応するかのように九州でも長崎、熊本と福岡の三都市のあいだで激しい誘致合戦が始まりました。「医科大学の福岡設置」を力説する地元紙の福岡日々新聞や地元財界のバックアップを受けて、最終的には大森治豊が手塩にかけて創り上げた「福岡県立病院の設備と実績」が決め手となって、明治三六年(一八九九)三月二四日、医科大学設立の勅令が出されたのであります。「京都帝国大学に第一医科大学と第二医科大学を置き、第二医科大学はこれを福岡に設置する」旨の勅令であり、翌三月二五日ついに

待望の『京都帝国大学福岡医科大学』が誕生したのです。それは幕末の慶応三年に福岡藩の蘭方医が結集して藩医学校「養生館」を設置してから三六年目のことでした。

明治三六年四月一日、大森学長のもと外科(担当大森教授)、内科(担当熊谷教授)、解剖(大沢岳太郎教授、東大兼任)、眼科(臨時代理)の四講座で開学されました。大森学長は、各講座の主任教授を主として東大から招聘するとともに、全国旧制高校から秀才をスカウトしてきました。新任教授連はいずれも欧州に留学し、最新の知識や斬新な方法論を持ち帰った新進気鋭の学者であり、教育面だけではなく創生期の医科大学にあつて先駆的な業績を残しています。これこそ創設者大森治豊初代学長の最大の功績と言えるものかも知れません。

創生期の教授のなかで、医学史上に残る偉大な業績を成した人物を紹介していきます。

東大を明治二三年に卒業した衛生学の宮入慶之助は、明治七年に教授に就任していますが、「日本住血吸虫」の研究でノーベル賞級の研究を残しています。後に『宮入貝』と呼ばれる小さな巻き貝がこの住血吸虫の中間宿主であることを突きとめ、日本住血吸虫発育史上重要な発見をなしています。これを駆除することで筑後川流域の住血吸虫症を防止できるようにしたのです。鳥栖市郊外に筑後川流域の市町村の地域住民が中心となつて建立した、宮入の偉業を讃える学勲碑を見ることができます。

大森学長が外科学を分担させるために招聘したのが、明治二四年東大卒業の徳島県出身の三宅速です。明治七年に外科学第二の教授として着任しています。東大スクリバ門下で、日本人として最初にこの福岡の地において開頭手術を行つたり脊髄腫瘍を摘出したりしていますが、ビルロートの高弟であつたミクリツツの外科学を日本に移入した、日本外科学の泰斗ともいふべき人物です。大正時代に来日したアシヨッフをして驚嘆せしめたという膨大な胆石コレクションを教室の大火にて失つておりますが、胆石症や胃癌に関する重要な著書を残しています。

相対性理論で知られるアインシュタインとの交友も有名で、故郷徳島県穴吹町の菩提寺の墓碑にはアインシュタイン

から寄せられた追悼文が刻まれています。

第一内科の始祖稲田龍吉は、明治三八年に着任しています。稲田は明治三三年に東大を卒業してすぐに青山胤通教授門下に入り、二年後には新設予定の福岡医科大学の教授候補としてドイツ留学を命じられています。帰朝するとすぐに福岡医科大学内科学第一の教授として迎えられました。福岡に赴任して初めて筑豊の炭坑を中心に多発するウイル氏病に接することになります。その後福岡医科大学の第二回卒業で後に第一内科の後継者となる井戸泰の協力を得て、ウイル氏病の病原体であるスピロヘータを発見するに至ったのです。大正四年（一九一五）一月二〇日に開催された福岡医科大学集談会の席で、「ウイル氏病病原スピロヘータ（二新種）確定に関する予報」と題して、病原体発見の報告を行いました。同年九月には、『日新医学』誌上に「日本黄疽出血性スピロヘータ病（いわゆるウイル氏病、熱性黄疽、黄疽疫）論」という論文を掲載しています。後にウイル氏病発見の優先権をめぐる問題が起こり、ウーレンフト（Uhlenhuth）の論文発表に先立った非の打ち所のない完璧な論文と評価されています。大正七年に恩師青山胤通教授の後継者として九大を離れ、東大に転出しております。大正一三年に、稲田が、米国のロックフェラー研究所を訪れた時には、野口英世が懇切に研究所内を隅々まで案内したということです。なお（大正六年）、各分離株を比較検討した野口英世が、稲田が発見した「黄疽出血性スピロヘータ」はその形態学的特徴から「レプトスピラ」と呼ぶべきであると提唱したことから、以後「黄疽出血性レプトスピラ（*Leptospira icterohaemorrhagiae*）」が国際用語になっています。

福岡医科大学初代病理学教授の中山平次郎は明治三三年に東大を卒業し、三浦守治教授と山際勝三朗教授がいた東大病理学教室を経て、途中欧州留学がありましたが、明治三九年（一九〇六）に病理学教室に着任しています。中山教授は古来より国際都市として栄えてきた博多の歴史に大きな関心を寄せ、病理学的な研究手法を歴史研究に導入することにより、「古代の博多」などの考古学的な論文をはじめとして、数々の画期的な成果を残しています。なかでも特筆すべきは、従来架空のものと考えられていた「袖の湊（そでのみなと）」の存在を証明しかつその位置を推定したことで、通説を

覆して鴻瀨館が旧福岡城跡内にあったことを証明したことです。近年の発掘調査により次第にその遺構が確認されつつあり、遺跡公園化が進められています。長兄の中山森彦も、明治四〇年から大正六年まで、軍医中佐（のちに少将）のままで福岡医科大学教授として外科学第二を主宰しています。

耳鼻科の創始者久保猪之吉は、明治四〇年に教授に就任しています。久保は歌人としても有名ですが、久保の医学面での第一の功績は耳鼻咽喉科学の第一人者として気管食道直達鏡検査手技を日本に移入したことです。ドイツのフライブルグ大学に留学した久保は、気管支鏡検査の開祖ともいべきキリアン教授 (Kilian) に師事し、直達鏡検査を習得し帰朝したのであります。後述する久保記念館には、フライブルグ大学のクスマウル (Kusmanul) が考案した食道直達鏡が、そのものではなく複製として展示されていますが、本国では戦禍で喪失してしまっているため、貴重な所藏品となっています。以後、福岡医科大学は日本における気管食道科学のメッカとなったと言っても過言ではないように思えます。学術的にも久保は、音声学、聴覚学や平衡神経科学などの耳鼻咽喉科関連領域において、先鞭を付けてきていますが、最大の功績は医学博物館として「久保記念館 (Kubo-Museum)」を後世に残したことでしょう。かねてより医学博物館の重要性を感じていた久保の信念を、具現化したものといえます。いまでこそ全国的に医学博物館ができていますが、当時（昭和二年）としてはある意味で画期的なものであり、九州大学が世界に誇りうる貴重な文化遺産と言えます。医史学資料の重要性を見抜いて、それらの蒐集保存をいち早く行っていった久保猪之吉の卓見と先見の明には、ただただ感心するばかりです。

心扉壁寄りに存在する房室結節に「田原結節」としてその名を残す田原淳（すなお）が、福岡医科大学病理学第二の教授として着任したのは明治四一年のことであり、草創期の教授としては最後の教授となります。大分県東国東郡安岐村瀬戸田で明治六年（一八七三）に生まれ、一五歳で親戚にあたる中津の田原家の養子になっています。明治三四年（一九〇二）に東大を卒業し、土肥慶蔵の皮膚科と入沢達吉の内科学教室で学んだ後、翌年中津に帰っています。明治三六年歐

州留学に出発しマールブルグ (Marburg) 大学に赴き、ドイツ病理学会の碩学であったアッシュOFF (Ludwig Aschoff) の門を叩いています。アッシュOFFから課題として与えられた心臓から多くの標本スライドを作成し、日夜を問わず顕微鏡を覗いたといえます。このような経験から、心筋細胞の刺激の流れを調べるといふ大きなテーマに取り組むようになり、遂に「刺激伝導系」の存在を明らかにするに至ったのです。一九〇六年グスタフ・フィッシャー社から二〇〇頁に及ぶドイツ語論文 [Das Reizleitungssystem des Säugetierherzens] を上梓していますが、その肉筆草稿は現在の医学部図書館の展示室において見ることが出来ます。帰国すると帰国中の船上で知遇を得た福岡医科大学病理学の中山平次郎教授の招聘を受けて、助教授となっています。そして明治四一年(一九〇八)に病理学第二の教授に昇任し、病理学を分担しています。以後「刺激伝導系」の研究は、田原と東大の同級生であった生理学の石原誠教授(明治三十九年教授任命)が受け継ぎ、生理学の面から田原説を証明していくことになったのです。

福岡医科大学の草創期、海外留学から帰朝し最新の知識や方法論を持ち帰った教授連と、全国の旧制高校から寄り集まった優秀な学生とは非常に親密な関係にありました。教授は世界的な仕事を成し親密に学生を指導することで、そして、学生はその期待に応えることで「新設の医科大学を盛り立てて行こう!」という気概があり、このことが他の医科大学には見られないような傾向を作り出したのでした。在学中から何かしらのテーマを貰い、余暇を生かして各教室の研究室を利用し研究を進め、学生として論文を書くことができたのです。福岡という地方の(その当時は)小都市にあつたことが、かえって新設医科大学において学問をするにも人物を養成するにも有利に働いたといえるのではないでしょうか。かくして明治四〇年(一九〇七)二月一二日、これまでに紹介してきた新進気鋭の錚々たる教授連の指導を受け、京都帝国大学福岡医科大学の第一回卒業生として五八名の医学士が誕生したのです。全国の旧制高等学校から、「我々の手で九大(福岡医科大学)を興さん!」という大志を抱いて入学してきた学生でした。

「予は福岡を以って墳墓の地となさん」との堅い決意をもって福岡に赴任し、幾多の苦難にも屈することなく、つい

には福岡の地に国立の医科大学を創設した大森治豊がよく口にした言葉が「田舎で盛名を挙ぐるは真の士なり」でした。その中には、後に九州帝国大学医学部の外科学教授となった赤岩八郎や後藤七郎がいますが、世界的に名前が知られているのが「甲状腺の橋本病」を報告した橋本策（はかる）です。医学領域において、日本人の名前が冠名（Eponym）として残っている、数少ないもののひとつです。三重県の伊賀上野出身の橋本は、卒業と同時に三宅速が主宰していた外科学第一に加入しています。三宅教授の指導のもとに、当時三宅教室に保存していた摘出標本の中から特異な組織像を呈する甲状腺の研究を行い、その成果を大正元年（一九一〇）にドイツの医学雑誌（Langenbeck's Archiv für Chirurgie）に「リンパ性甲状腺腫（Struma lymphomatosa）」として発表したのです。日本が世界に誇れる偉業であり、この橋本策の偉業を顕彰する意味も含めて、平成四年（一九九二）に「橋本病発見八〇周年」を記念する講演会が、内外から多くの参加者を集めて医学部構内の中央講堂において開催されました。

医学史の領域でも九州大学医学部は先賢学者を輩出しています。小川政修（おがわまさなが）は教授として、九州帝国大学卒の阿知波五郎（あちわごろう）、三木栄（みきさかえ）や岩熊哲（いわくまとほる）らは、在野の研究者として貴重な業績を残し、また医史学会においても重きをなしていました。三木栄の主要著書としては『体系世界医学史』、『朝鮮医学史及疾病史』、『人類医学年表—古今東西対照（阿知波との共著）』があり、阿知波の著書としては『近代日本外科学の成立—わが国外科に及ぼしたヨーロッパ医学の影響』、『ヘルマン—ブルーハーヴェー—その生涯、思想わが蘭医学への影響』、『京都の医学史』などがあげられます。

岩熊は故郷直方に杏仁医館を構えて診療に従事しながら、医学史研究を行い『解体新書を中心とする解剖書誌』、『医学史論考』を上梓しています。また、九州大学医学部同窓会誌であった『九大医報』に「杏仁医館随筆」を連載され、医学史研究の成果を発表してこられました（昭和一八年急逝、享年四五歳）。

大正二年（一九一三）、衛生学の宮入教授の後を引き継いで細菌学（当初は衛生学の一分野であった）教授となったのが、



明治三六年に東大を卒業した小川政修(まさなが)氏です。細菌学界では寄生原虫学の専門家として知られ、大正七年(一九一八)に出版した『住血原虫論』は名著と評価され、野口英世も絶賛したと言われていますが、医史学研究者としても有名です。九州大学を定年退官後は、東大にあつて西洋医学史を講義しています。これなどはまさにシーゲリスト(Siegrist)の「医学史を骨董視せずこれを思想史として取り扱う時、若き医学者の養成上に大なる意義がある」という言葉を実践に移したものと言えるのではないのでしょうか。東大で行った一連の講義をもとに上梓したのが『西洋医学史』です。最近再評価されてきている「パラケルスス(Paracelsus)」研究に先鞭をつけたのも小川氏の功績のひとつにあげられます。また氏は、医学の進歩に大きく貢献した先哲が著した医学書の医史学資料としての重要性を見抜き、現在では本国にも残存していないような貴重な医学書を蒐集しています。その一端が、医学部付属図書館に展示されているヴェサリウスの『ファブリカ』であり、パレの『パレ全集』であります。細菌学教室の図書室には、氏が「先見の明で」蒐集した貴重書が数多く収蔵されていますので、氏の遺産を後世に伝えるべく書誌学的研究を行って行くことが必要です。

「古往今来、斯学の進歩発達は、言うまでもなく単なる操作や研究方法の改変のみによつて成就させられるものではない。肝要なるは、卓抜なる精神と緻密なる思想である。この精神と思想こそ能く斯学の真義を発揚するゆえんであらう。これを如実に示すものは即ち歴史である」。これは小川氏が『西洋医学史』の結語として掲げた、『扶氏経験遺訓(緒方洪庵がフーフエランド Hufeland の著書を翻訳したもの)』の一節です。

医史学研究の基本理念は、まさにこの一節にあると言えないでしょうか。

以上、京都帝国大学に付属した単科の医科大学として始まった福岡医科大学が、九州帝国大学医学部に昇格していく過程を述べさせていただきました。